

タスクの複雑性、母語、日本語能力が談話構成に及ぼす影響—指示表現・受身表現の使用について—

Effects of Task Complexity, L1 and Proficiency on the Use of Referential and Passive Forms in L2 Japanese Discourse

中浜 優子 (なかはま ゆうこ)

慶應義塾大学

This study investigates how task complexity, learners' L1 backgrounds, and proficiency levels influence the ways in which learners introduce and maintain referential topics in L2 Japanese oral narratives. Narrative discourse produced by two groups of learners of Japanese, one whose L1 is typologically parallel to and one whose L1 is distant from Japanese (Korean and English, respectively) was investigated at two different proficiency levels (intermediate and advanced levels, based on the ACTFL guidelines). Native speakers (NS, hereafter) and nonnative speakers (NNS, hereafter) of Japanese constructed two narratives: looking at a series of pictures, and reconstructing a story after seeing a silent film. The former task was supposed to elicit narratives in a "here and now" context (H/N, hereafter), while the latter, in a "there and then" context (T/T, hereafter). The latter task is considered more complex than the former, as in the T/T task, the speakers would need to code, store, and search the content of the story in viewing the film as well as retelling the story, and thus it is cognitively more challenging than the H/N setting.

The results showed that different narrative tasks brought out differing topic management patterns in both NS and NNS narratives. Especially notable was that the task complexity affected the L2 Japanese narrative discourse produced by lower proficiency level English speakers. The T/T narrative task revealed higher grammati-

cal accuracy in English speakers' narratives, such as the use of NP+*ga*' and non-use of particle omissions. Yet, English speakers under-produced zero anaphora in their T/T narratives, whilst the production of zero anaphora reached target-level in their narratives in the H/N context. In contrast, Korean speakers showed consistent grammatical accuracy irrespective of task types or proficiency. It was argued that positive L1 influence was observed in Korean speakers' Japanese L2 narratives in referential topic management, and negative L1 influence was observed in English speakers' corresponding narratives, as Korean and Japanese share comparable linguistic features with respect to code topic continuity and discontinuity. While Korean speakers showed similar patterns of use of particles and zero anaphora to NS of Japanese throughout the narratives, their performance in the production of passive structures differed from NSs, and resembled the performance of English speakers. As proficiency increased, both learner groups produced more passive structures. The advanced level learners produced nearly twice as many passive structures in H/N than T/T, whereas task complexity did not have an influence on the number of passive structures produced in NS narrative discourse. Moreover, even advanced level learners in the H/N context produced fewer instances of passive structures than their NS counterparts. It is argued that this resulted from the different ways in which Japanese and English/Korean speakers place their focus in developing a story in their L1. Specifically, Japanese tend to place their focus on the main characters and tell a story from their viewpoints, whereas English and Korean speakers put their focus on action or fact. Japanese speakers in the current study kept main characters in the topic position; sometimes as agent in active structure, other times as patient in the passive structure. English and Korean speakers tended to switch the topic of the sentence between protagonists and antagonists, instead of keeping the protagonists in the topic position, and as a result, produced fewer instances of passive morphemes.

本研究は、学習者の母語、日本語能力、タスクの複雑性が、ナラティブ談話のトピック管理に及ぼす影響を調査したものである。韓国語・英語を母語とする中・上級レベルの日本語学習者と日本語母語話者に、目の前にあるものを描写するナラティブ(同時空間:H/N)と、記憶に頼りながら描写するナラティブ(非同時空間:T/T)を口頭で語ってもらった。

韓国語話者は英語話者に比べ、助詞とゼロ照応の適切な使用等、トピック管理能力が早くから備わっており、タスク間での差はなかった。英語話者においては、T/Tタスクの方がH/Nより助詞の正用を引き出す傾向にあったが、ゼロ照応の産出に関してはH/Nの方が、産出割合が増した。受身表現に関しては、学習者両グループとも、日本語母語話者より産出数が少なかった。これは、立場志向を取る日本語談話パターンと事実志向の英語・韓国語談話パターンの違いが受身形の産出数の違いという形で現れたものだと思う。

Keywords: Japanese oral narrative, task complexity, referential topic

はじめに

文脈内での言語使用を重視する機能主義言語学の考えでは、指示対象トピックの適切な導入・維持が、物語談話の一貫性向上につながる一要因だと捉えられている。談話におけるトピックの連続性の高さを示すマーカーとして、代名詞やゼロ照応が挙げられるが、日本語や韓国語などの言語では、トピックの連続性の高い名詞を照応する際には、照応詞の省略、即ち、ゼロ照応の使用が頻繁に見受けられる。¹

第二言語 (L2) 習得分野の先行研究 (Nakahama, 2003a, Polio 1995, Yanagimachi 2000等) では、ゼロ照応の適切な使用は、学習者の日本語能力と共に増えることが明らかになっている。また、英語と日本語ではトピックの連続性が比較的高いとされる定性マーカー (英語では定冠詞、日本語では「は」) の方が連続性の低い不定性マーカー (英語では不定冠詞、日本語では「が」) より習得が早いことが分かっている (土井・吉岡1990, Chaudron & Parker 1990, Clancy 1985, Huebner 1985, Master, 1997, Sakamoto 1993等)。しかし、Nakahama (2003b) では日本語学習者にとって困難であろうとされる「が」においても、日本語に近似した助詞のシステムを持つ韓国語を母語とする学習者にとっては、初中級レベルで既に日本語母語話者 (NS) と同様、適切な使用がなされていることが報告されている。

また、タスクの複雑性が物語談話における文法の正確性、談話の複雑性及び流暢性に与える影響についても指摘されている (Robinson, 1995) ことから、本研究では、学習者の母語、日本語運用能力とタスクの複雑性が、L2 物語談話の導入・展開におけるトピック連続性指標の選択 (具体的には指示表現と受身表現の使用) に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

先行研究

談話内でのトピック管理

Givón (1983) は、談話というものは、多命題で構成されており、いくつかの節が統合されて成り立つテーマ段落として捉えるべきだと主張し、談話の一貫性を左右する重要な要因として、トピックの連続性・非連続性を挙げている。そのGivónの異言語間トピック連続性の尺度によると、談話内の焦点となっている最も連続性の高いトピックは、ゼロ照応で記され、新情報として談話に導入された、最も非連続的なトピックは、完全な形の名詞句で記される。すなわち、物語談話において、指示対象物を最初に導入する際は、完全名詞句で表し、話題のトピックとして維持され、連続して言及される場合は、ゼロ照応として表されるというのである。Givón (1983) や Tomlin (1990) などの機能言語主義者の考えでは、トピックの導入・維持、すなわち話者が談話内でトピックをいかに適切に管理して行くかによって、談話の一貫性が左右されるというのである。

英語では、新情報導入には、名詞句+不定冠詞を使用し、一度導入されたもの、すなわち旧情報について言及する場合には、名詞句+定冠詞を使用するのがプロトタイプであるとされている。また、話題のトピックとして連続して言及する場合は、代名詞句が使用される (Chaudron & Parker, 1990)。それに対し、日本語では、主語/トピックの位置で新しい指示対象について言及するには、助詞「が」を用い、既知の指示対象には助詞「は」を用いる。最も高いトピック連続性を示すためには、ゼロ照応が用いられる (Hinds 1983)。韓国語でのトピック導入・維持のパターンは日本語と類似し

ており、新しい指示対象を導入する際は「が/を」を、既知の指示対象には「は/を」を用い、トピック連続性が高い対象物には、ゼロ照応が使用される (Kim 1989)。

談話内での名詞句・照応詞習得における言語転移

Li & Thompson's (1976) の主題・主語卓越類型モデルを援用した研究の中には名詞句・照応詞習得における第一言語 (L1) からの言語転移について考察されたものがあるが (Fuller & Gundel 1987, Gundel & Tarone 1983, Huebner 1983, Jin 1994等)、未だ統一した見解は得られていない。Huebner (1983) やRutherford (1983) が言語習得の初期の段階において見られる主題卓越性を、母語からの言語転移と主張するのに対し、Fuller & Gundel (1987) では、ゼロ照応の出現は、初期に見られる主題卓越の段階の一つの普遍的特徴であると提言している。しかしJin (1994) やPolio (1995) が行った主題卓越言語の習得研究では、Fuller & Gundelが主張した、習得の初期に見られるという主題卓越性は見られなかったことから、主題卓越の普遍説は覆されることとなった。Polio (1995)、Nakahama (2003b) では、それぞれ中国語習得、日本語習得において、母語に主題卓越言語をもつ学習者にとっても、初級レベルでは、ゼロ照応の使用は困難であったことが報告されている。

一人称・二人称・三人称の3種のナラティブを比較分析したYanagimachi (2000) の研究では、最初から視点の移動の余地がない一人称・二人称のナラティブの場合は、ゼロ照応の運用に問題はなかったものの、自ら視点を決めて話をしていくというタスクになれば、学習者と母語話者間の談話構成に大きな違いがでることが分かった。

このYanagimachiの研究結果からも分かるように、視点とトピック管理の密接な関連は明白である。日本語が立場志向の傾向を持つ言語であるのに対し、英語、韓国語、中国語などは事実志向の言語であると捉えられており (日英比較に関する詳しい考察は水谷1985参照)、日本語を母語とする話者が、自ら視点を特定の登場人物にあて、その人物を中心に話を構築していくのに対し、英語などの母語話者の場合、起こった事象に焦点をあてる。日本語母語話者では、特定人物に視点をおくため、中心人物をトピック性の高い位置 (主語の位置) においたまま、授受表現や受身形の使用などにより、ストーリーを展開していく傾向が見られるが、事実志向の言語を母語に持つ学習者が日本語を話した際、授受表現や受身形の使用数は、上級レベルに至っても、母語話者に比べ大幅に下回る傾向があることが報告されている (金2001, Nakahama 2003b, 田代 1995, 渡辺1996, Yanagimachi 2000等)。また、他の文法項目に比べても、視点や受身形は、学習者にとって習得がより困難であることも分かっている (田中, 1996, 1997)。これらの結果から、視点のおき方という概念・意味の言語的表出に関しては、習得が難しいというだけではなく、母語からの影響が避けがたいということが分かる。(意味の転移、言語の相対性についての詳しい考察はOdlin, 2002, 2005等を参照のこと)

Nakahama (2003b) では母語からの言語転移を調査するため、韓国語と英語を母語とする学習者グループ (中級下・中級上・上級) を比較した。その結果、韓国語話者の発話で、「が」「は」などの助詞の使用に母語からの正の転移が見受けられたものの、ゼロ照応の使用においては、中級下レベルでは学習者の言語的制約が正の転移の妨げになったことが分かった。また、英語話者に関しては、日本語運用能力が低いと、「が」の習得が難しく、「は」で代用されていることが分かり、定性 (日本語では「は」、英語では定冠詞 (the)) の習得が不定性 (日本語では「が」、英語では不定冠詞 (a, an)) の習得より先行すると示されている先行研究 (日本語習得はClancy 1985,

Sakamoto 1993等、英語習得はChaudron & Parker 1990, Huebner 1985, Master, 1997等参照のこと) や、定性を表す言語形式の使用がコンテクストに関わらず過剰般化され、その正用が熟達度に比例し増えていくという研究結果 (Andersen 1977, 遠山 2005, Huebner 1983等参照) を支持することとなった。

目の前にある物を描写しながらストーリーを構築する方法 (Here and Now, 以下H/N) でデータ収集を行ったNakahama (2003b) では、最もトピック連続性の高い文脈において、使用された全言語形式を分母とした際のゼロ照応の使用割合は、英語を母語とする日本語中級下レベルで61.3%、中級上レベルでは84.8%であった。それに対し、無声映画を見た後でストーリーを思い出しながら再構築する方法 (There and Then, 以下T/T) の抽出法を用いたNakahama (2003a) の英語母語話者の日本語中級レベルではゼロ照応使用率が56%であったことから、ゼロ照応の使用率にタスクの種類 (ナラティブ抽出法) が何らかの影響を及ぼした可能性が示唆される。

Robinson (2003) によると、複雑なタスクは簡単なタスクよりも注意の負荷が高く、この負荷の違いが学習者の発話の正確性、流暢性、複雑性に影響を及ぼすとしている。T/TとH/Nのタスクを比べてみると、前者では、登場人物等、物語の内容を認知的手段により貯蔵、構築しなければならないことから、H/Nに比べ認知面で負担が増えることから、より複雑なタスクであると言える (Ishikawa, 2005)。この認知面での負担の高低が、二つのタスクでのトピック連続性の高い文脈におけるゼロ照応と完全名詞句の産出割合に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

H/NとT/Tのタスクにより産出された英語のL2ナラティブに見られる文法の正確性、複雑性、流暢性などを取り扱った研究にRobinson (1995) がある。Robinsonの研究によると、タスクとしての複雑性の高いT/Tの方が、抽出されたナラティブの文法の正確性・複雑性が高いということが分かった。文法の正確性の一つとして、冠詞の使用について考察しているが、T/Tの方が、H/Nよりも冠詞の正用が多いことが報告されている。Robinson (1995) はT/Tに見られる冠詞の正用率の高さについて、単純に絵を描写していくH/Nに比べ、話者が、命題間をうまく繋いで、結束性のあるストーリーを構築するため、多大な注意を払っていった結果、T/Tのタスクでより高い正確性が得られたのではないかとしている。後に、Robinson (2004) は認知仮説 (Cognition Hypothesis) として、複雑性の高いタスクは、学習者が備え持つ言語的資源の活用をより多く引き出す、と唱えている。以上、概観してきた様々な先行研究の結果を踏まえ、本研究では、以下の2つの研究設問を明らかにすることを試みる。

研究設問

- 1) 日本語と類型論的に近似した言語を母語とする学習者と相違した言語を母語にもつ学習者間では、物語談話におけるトピック管理能力の発達に差異が見られるか。
- 2) タスクの複雑性は、話者のトピック管理にどのような影響を及ぼすのか。また、タスクの複雑性が与える影響は、学習者と母語話者で類似するのか。

方法 被験者

本研究の被験者は、日本で日本語を学習している、英語を母語とする中級レベル (EM) 11名、上級レベル (EH) 10名、韓国語を母語とする中級レベル (KM) 10名、

上級レベル (KH) 10名、及び日本語母語話者 (NS) 10名であった。

日本語非母語話者の被験者のレベル分けであるが、本研究のタスクを行う前に、Simulated Oral Proficiency Interview (SOPI) のタスクの一部を行ってもらい²、ACTFLガイドラインに基づき、筆者が学習者の日本語能力を判定した。中級中、中級上と判定された学習者を中級グループに、上級下、中、上と判定された学習者を上級グループに振り分けた。それぞれのレベルから三つずつSOPIタスクのデータを無作為抽出し、別のSOPI評価者にレベル判定してもらい、評価者間の信頼性を確かめたところ、Cohenのカッパ係数は0.86で、評価者間の一致度が高いことが分かった。

被験者の平均年齢はNS (20.3歳)、EM (21.5歳)、EH (26.8歳)、KM (23.0歳) KH (24.2歳)、男女比はNS (男:5、女:5)、EM (6:5)、EH (6:4)、KM (6:4) KH (3:7) であった。日本語学習歴、日本滞在年月の平均はそれぞれ、EM (50.7ヶ月、9.5ヶ月)、EH (64.7ヶ月、32ヶ月)、KM (18.9ヶ月、9.5ヶ月)、KH (57.3ヶ月、18.3ヶ月) であった。

タスク (H/NタスクとT/Tタスク)

前述のH/N、すなわち、目の前にある物を描写する、同時空間でのストーリー構築データ抽出のため、文字のない24枚の連続した絵からなる絵本*Frog, Where Are You?* (Mayer 1969) を使用し、それを見ながらストーリー構築をしてもらった。また、非同時空間でのストーリー構築、すなわちT/Tタスクとしては、無声映画*Winter Carousel (from The Cameraman's Revenge and Other Fantastic Tales by Image Entertainment)* をまず観賞した後、話を頭の中でまとめて、映画を見ずに、その内容を被験者に口頭で話してもらった。³ 両タスクとも発話を30分以内で終了するように指示を出した。どちらの物語も、3名(匹)の主人公がおり、それらを取り巻く脇役的存在の登場人物(動物)が出てきてストーリーが展開されていくというものである。Robinson (2001) 等の先行研究で、タスクの順序が言語産出に影響を及ぼす可能性が示唆されていることを踏まえ、影響を最小限にするため、全てのグループの半分の被験者はH/N→T/Tの順に、後の半分はその反対の順序でストーリー構築をしてもらった。

ナラティブの聞き手は、筆者と研究補佐2名が担当した。聞き手は、質問は控え、発話は相づち程度に抑え、話し手には基本的に独話調で話してもらった。

フォローアップ面接

フォローアップ面接をNS全員と学習者数名 (EM3名、KM2名、EH3名、KH3名) に実施した。インタビューでは、自分の発話の内容をテープで聴いてもらい、ストーリーの中でのトピック管理のための「が」、「は」などの助詞、ゼロ照応、受身形の使用などについて調査した。

分析

本稿では、「トピック管理」の操作上の定義を「トピックとなり得る指示対象の物語談話への導入と維持」とし、日本語学習者、母語話者の物語談話におけるトピック管理能力について詳しく分析する。それに際し、同じ絵本でデータ収集をした Nakamura (1993)、Nakahama (2003b) の枠組みを援用し、1) 指示対象の導入、2)

トピックスイッチ、3) トピックの連続的な言及の3つの文脈ごとに、データを文字化・コード化し分析した。指示対象の導入とは、「任意の文要素で談話に最初に導入されたもの」であり、トピックスイッチとは、「既に物語に導入されている指示対象で、(トピック性を失っていたものが) 談話のトピックとして主語の位置で再導入されたもの」と定義する。トピックの連続的な言及とは「主語の位置におけるトピックスイッチの直後に(主語の位置で) 産出され続ける指示対象」とする。指示対象導入の文脈は、トピックの連続性が最も低く、トピックの連続的な言及の文脈では、トピックの連続性が最も高いと言える。以下、1) に指示対象導入の例を、2) にトピックスイッチとトピックの連続的な言及の例を示す。

1) 男の子が蛙を捕まえてきてそれを瓶に入れました。

この例では、男の子の導入には「が」が使用され、蛙の導入には「を」が使用されている。

2) 犬が窓から飛び降りてしまいました。男の子は怒っています。(○) 森の中へ行って(○) 穴を探しました。

この発話文は、ナラティブ開始の数発話後に出てきたものである。ここに至るまでの段階で、男の子と犬の導入はすでに終わっており、ここでは、犬が談話のトピックとして再導入されて始まっている。しかし、談話のトピックは男の子に移行し、名詞と「は」によって主語の位置に現れてきている。この「が」と「は」双方とも、トピックスイッチを表す言語形式とみなされる。その後、男の子がトピックのまま、話が続いていくが、「森の中へ行く」、「穴を探す」という動作の主語として照応詞は使われず、ゼロ照応で示されているのが分かる。ここで見られる二度のゼロ照応(○)の使用にあたる部分が、トピックの連続的な言及の例である。

コード化の客観性を保証するため、学習者グループからデータを3つずつ(計12データ)無作為に選び、別の日本語母語話者にもコード化してもらい、結果を比較したところ、Pearsonの相関係数は.995で、高い相関関係があることが分かった。

データの分析方法は、それぞれの文脈で使用された名詞句の出現頻度ではなく、その使用割合の平均値を比較した。⁴ これは、被験者によって発話の長さが統一されておらず、それゆえ合計回数を従属変数とした場合、発話数が短い被験者のナラティブでは、ある言語形式の出現頻度は、発話数の長い被験者のナラティブより必然的に低くなる可能性が高い。つまり、公平な比較ができなくなる。それに対し、平均使用割合を比較すれば妥当性の高い検証に導くことができる。ただ、助詞脱落など、産出率の非常に低い文法項目もあった。こういったケースでは分散分析を行う上での分布規定の条件が犯されることになるが、関連の模擬実験研究(Harwell, Rubinstein, Hayes, & Olds 1992等参照のこと)では、分散分析での分布規定が犯されても、その統計処理による結果の妥当性は変わらないという結果が出ていることから、本研究では統計処理は分散分析で行う。

まず、各文脈(指示対象導入・トピックスイッチ・連続的な言及)での使用言語形式を調べ、また受身形の出現数についても結果を報告する。

結果と考察 指示対象の導入

日本語母語話者と日本語学習者が産出した、H/NとT/Tでの指示対象の導入の割合の平均値をそれぞれ表1の上段、下段に示す。頻繁に現れた言語形式、及び各グループに特徴的な項目以外は「その他」としてまとめて記載する。

日本語学習者の産出データの指示対象導入の分析において、韓国語話者・英語話者両グループで、「が」「は」「NP+φ(助詞の脱落)」の使用に特徴的パターンが見られた。以下にその特徴を明らかにする。

1. 「NP+が」と「NP+は」の使用

指示対象を導入する際、H/N、T/T両タスクにおいて、NSだけでなく、学習者も日本語レベルや母語に関わらず、「が」の使用割合が最も多いことが分かった。5グループの平均は、H/Nで48.1%、T/Tで60.8%であった。タスク間の被験者内反復測定を行った結果、タスク間の差は有意であった ($F(1,46) = 11.8, p = .002, \eta^2 = .198$)。

母語別、タスク別に見てみると、英語話者の場合、H/Nでの「が」の産出割合は、中級レベルでは低いが(28.5%)、上級になると増加し(47.6%)、NS(52.9%)に近づいて行っているのが分かる。一方、韓国語話者の場合、レベル間でそれほど違いが見られず、むしろ、中級の方が、「が」の産出率が高かった(中級:63.1%、上級:50.5%)。NS、学習者の総5グループを比較し、分散分析を行ったところ、「が」の使用割合にグループ間での有意差が見られた ($F(4,46) = 3.81, p = .009, \eta^2 = .249$) シェフェーの多重比較により、有意差はEMとKMにあることが分かった ($p < .05$)。T/Tでは、グループ間で、「が」の使用率に有意差は見られなかった。

表1 指示対象導入に使われた言語形式: H/N、T/Tタスク
(数値は使用形式ごとの割合の平均値)

NP+	が	は	を	に	も	助詞脱落	その他
英語中級							
H/N	28.5	12.3	13.8	5.8	9.5	16.5	13.5
T/T	41.5	31.0	3.6	6.7	7.1	0	10.1
韓国語中級							
H/N	63.1	0	14.6	2.0	2.9	0	17.5
T/T	71.8	3.1	5.0	4.2	6.4	0	9.5
英語上級							
H/N	47.6	10.9	11.0	10.0	2.5	0	17.9
T/T	64.4	2.0	1.7	6.4	13.0	0	12.6
韓国語上級							
H/N	50.5	4.5	12	7.8	2	0	21.2
T/T	65.2	1.7	0	6.7	4.5	5.0	17.0
母語話者							
H/N	52.9	0	19.7	11.1	4.5	0	13.3
T/T	63.0	0	0	7.4	5.2	0	24.5
合計平均値							
H/N	48.1	5.7	14.1	7.3	4.4	3.6	16.5
T/T	60.8	8.0	2.1	6.3	7.2	1.0	14.7

注 H/NはHere and Now, T/TはThere and Thenのタスクを表す。

定性マーカー「は」の使用については、NSでは見られず、韓国語話者ではタスクタイプ、日本語熟達度に関係なく、産出率は低かった。一方、英語話者ではH/Nでは中級で12.3%、上級ではやや減少し10.9%であった。

前述のように、T/Tでは指示対象を導入する際、全体的に「が」の使用が多く見られたが、EMグループでもその傾向があり、H/Nの28.5%から41.5%まで使用率が上がっている。その結果、「は」の使用率も減少するのが予測されたのであるが、12.3%から31.0%まで使用率が上昇していた。EMグループは、H/Nでは「が」「は」以外に助詞の脱落、「を」の使用などの言語形式も用いられていたのに対し、T/Tでは、助詞の脱落は見られず、「を」の使用も3.6%にとどまっていた。また（ここでは「その他」の中に含まれる）助詞の誤りがH/Nで6.1%ではあるが見られたのに対し、T/Tでは全く見られなかったという違いもあった。

英語話者グループのT/Tでの「は」の使用割合は、上級レベルでは2%と使用率が中級レベルに比べると大幅に下がっており、これは、上級レベルでは「が」の使用率が大幅に増えたためだと思われる。母語話者・非母語話者5グループを比較したが、EMグループにおける「は」の平均使用割合は他の4グループに比べて有意に高いのが分かった ($F(4,46) = 7.82, p = .000, \eta^2 = .405$)。このことから、H/N同様、英語話者の「は」の適切な使用（不使用）に関しては、日本語能力と正比例し、韓国語話者に関しては、中級レベルから既にNSと類似したパターンを提示しているのが分かった。

以上、「が」と「は」の使用（不使用）についてタスク間、グループ間比較をしてみたが、何故T/Tの方が、「が」の産出割合が増え、また、文法の正確性も上がったのだろうか。

Robinson (1995) でも、T/Tで物語を構築する時は、H/Nよりも、英語における冠詞の正用が増えるという報告があったが、これは、話者が頭の中に貯蔵してある内容を慎重にアクセスし、まとめながら話すため、新しい登場人物を導入する際、それだけ文構造にも「注意」を払うようになり、文法の正確性が上がったのではないかと考えられる。T/Tにおける、EMの文法の正確性は「が」の使用率の増加だけではなく、助詞の脱落、助詞の誤りがなくなったことから垣間見られた。H/Nでは、前者が16.5%、後者が6.1%見られたのに対し、T/Tではどちらも0%であった。Robinsonの英語習得研究と本研究の日本語習得研究の結果から、タスクの複雑性がナラティブ構築における文法の正確性に影響を及ぼす可能性は、普遍的なものではないかと考えられる。

T/Tでは学習者両グループにおいてレベル間の差はなかったのであるが、H/Nでは英語話者の場合、「が」の使用率は日本語熟達度に比例して上昇しており、L2習得において、不定性マーカーの正用が外国語能力レベルとともに増えていくという先行研究をも支持する結果となっている。一方、日本語と同じ後置詞のシステムを持ち、「が」と「は」に対応する助詞を使用する韓国語話者においては、タスクタイプや日本語能力に関係なく、母語話者と同じように首尾一貫した「が」の適切な使用が見られた。

全てのNSと学習者の一部にフォローアップ面接を行ったのであるが、NSは「が」と「は」の使用法について、意識的に使用してはいないことが分かった。学習者では、インタビューをしたEM3名とも、「が」と「は」を差別化しておらず、どちらも主語を示す助詞だという回答が得られ、EH3名のうち2名は、「が」と「は」の用法について言語学的知識を持っているのが分かった。韓国語話者においては、中級、上級5名の

学習者全員が、韓国語にも「が」と「は」に対応する後置詞があることから、「が」、「は」に韓国語の助詞「가, 이」、「는, 은」を対応させて使用していることが分かった。このことから、母語と目標言語の距離が近い場合、両言語の文法的類似点を把握しており、それをうまく活用し、第二言語としての日本語の談話構成に役立てていることが分かる。それに対し、英語話者のように、母語に対応するものがない言語項目を習得する場合、指標にするものが存在しないため、長年の学習と肯定的・否定的証拠にさらされることにより、上級レベルまで進んで始めて、談話においての適切な「が」と「は」の使い分けができてくるのではないかと思われる。⁵

2. 「NP+助詞の脱落」⁶

助詞の脱落がH/NのEMグループで16.5%も見られ、「が」の28.5%の次に使用率が高いのが分かった。これは先行研究 (Nakahama 2003b) の結果を支持するものとなり、H/Nでは、英語を母語とする日本語学習者は上級に達するまでは、助詞を脱落させる傾向がある事が改めて確認された。英語には助詞のシステムがないため、負の転移が助詞の脱落という形で現れた可能性が高い。

助詞が脱落された箇所を見てみると、本来「を」や「が」を使用すべき箇所での脱落であり、また、助詞が脱落された名詞句は主人公であったり脇役であったりしたことから、EMはランダムに助詞を脱落させていることも分かった。H/Nでは、NS、韓国語話者に関しては、助詞の脱落は見られなかった。

T/Tにおいては、助詞の脱落は、KHの5%の産出という例外はあったものの、EMを含む4グループで検出されなかった。これは、前述の、非同時空間における事物言及の際の文法の正確性に貢献するものであり、Robinson (1995) の研究結果を支持することとなった。

以上、指示対象導入の際に使用された主要言語形式について、タスク・グループ間比較をしてきた。T/Tでの全グループにおける「が」の使用割合増加、EMにおける文法の正確性向上などが確認され、同時空間・非同時空間でのストーリー構築という、タスクの複雑性の違いが助詞の産出に影響を及ぼした可能性が指摘できる。

トピックスイッチ (指示対象の再導入)

トピックスイッチの文脈では、「が」、「は」、「も」、助詞の脱落、ゼロ照応の5つの言語形式の使用が見られた。両タスクでの言語形式の割合の平均値を表2に示す。

トピックスイッチの文脈において使用率の高かったものに、「が」と「は」が挙げられる。各グループの使用率を比較したところ、その使用割合に有意な差はなかった (H/Nにおける「が」の使用: $F(4,46) = 0.73$, $p = .58$, 偏 $\eta^2 = .059$ 、「は」の使用: $F(4,46) = 0.63$, $p = .65$, 偏 $\eta^2 = .052$ 、T/Tにおける「が」の使用: $F(4,46) = 0.54$, $p = .71$, 偏 $\eta^2 = .045$ 、「は」の使用: $F(4,46) = 1.1$, $p = .37$, 偏 $\eta^2 = .09$)。先行研究では、助詞別に分けず、完全名詞句として、ゼロ照応との使用割合を比べている場合が多い (Clancy 1985, Yanagimachi 2000等) ので、本研究でも、「が」、「は」、「も」の合計を完全名詞句とし、ゼロ照応の使用頻度と比較することにする。

グループ間比較の際は話者によって発話量が違うことから、公平性を考慮に入れ、平均使用割合を比較してきたが、今回は被験者間ではなく被験者内での項目比

表2 トピックスイッチに使われた言語形式: H/N、T/Tタスク
(数値は使用形式ごとの割合の平均値)

NP+	が	は	も	助詞脱落	ゼロ照応
英語中級					
H/N	36.3	30.1	0.6	11.2	21.8
T/T	36.7	42.4	2.2	11.9	6.7
韓国語中級					
H/N	33.5	43.4	1.6	0	21.5
T/T	45.3	31.9	0.9	4.2	17.8
英語上級					
H/N	41.2	36.9	3.6	0.4	18.0
T/T	52.1	25.5	7.7	4.1	10.6
韓国語上級					
H/N	29.7	44.8	1.8	0	23.7
T/T	46.7	23.4	1.9	6.0	22.0
母語話者					
H/N	25.1	33.1	2.3	0	39.6
T/T	40.0	30.5	2.9	2.1	24.1
合計平均値					
H/N	33.2	37.5	1.9	2.5	24.8
T/T	44.1	31.0	3.1	5.8	16.0

注 H/NはHere and Now, T/TはThere and Thenのタスクを表す。

較なので、使用頻度の合計をカイ二乗検定を用いて検定した。その結果、両タスクとも全てのグループで、完全名詞句の使用頻度がゼロ照応のそれよりも1%水準で、有意に多いことが確認できた。⁷

各グループでトピックスイッチの対象となった登場人物を、主要人物（主人公）と非主要人物（脇役）に分類したものを表3に示す。

表3にあるように、トピックスイッチの対象となった登場人物は、両タスクで大多数（H/N: 92.5%、T/T: 89.8%）が主要登場人物であることが分かり、先行研究（Clancy, 1992）を支持する結果となった。

ゼロ照応

トピックスイッチにおけるゼロ照応の使用割合の総グループ平均はH/Nで24.8%、T/Tで16.0%であった。被験者内タスク間の比較を検定した結果、トピックスイッチの文脈

表3 トピックスイッチの対象人物
(一段目の数字は使用頻度、二段目のカッコ内の数字は使用割合)

	H/N 主人公	H/N 脇役	T/T 主人公	T/T 脇役
英語中級	100 (91.7%)	9 (8.3%)	117 (88.0%)	16 (12.0%)
韓国語中級	173 (94.0%)	11 (6.0%)	113 (94.2%)	7 (5.8%)
英語上級	239 (89.2%)	29 (10.8%)	182 (87.5%)	26 (12.5%)
韓国語上級	205 (94.5%)	12 (5.5%)	156 (90.2%)	17 (9.8%)
母語話者	105 (94.6%)	6 (5.4%)	143 (90.5%)	15 (9.5%)
合計	822 (92.5%)	67 (7.5%)	711 (89.8%)	81 (10.2%)

注 H/NはHere and Now, T/TはThere and Thenのタスクを表す

で使用されたゼロ照応の使用割合はタスク間で有意に違うことが分かった ($F(1,46) = 8.0, p = .007, \eta^2 = .149$)。

トピックをスイッチするということは、その行為により、ストーリーの中での流れが変わる可能性を秘めているという意味で、聞き手にも話し手自身にも注意が喚起させられる。H/Nのように目の前に描写する絵がある場合、聞き手も話し手もある程度情報を共有していることから、トピックをスイッチさせる際に、ゼロ照応を用いたとしても、行動の主体が誰であるか想像がつく。それに比べ、T/Tでは、聞き手は話し手の発する言葉のみを頼りに、ストーリーの内容を理解していかないとはいけない。今回、聞き手に質問などは控えてもらったこと、また話し手にもできるだけ独話の形で話をしてもらったので、話し手は聞き手になるべく分かりやすく話を伝えていかなければならないという意識も働いたはずである。

前述のとおり、話者がトピックスイッチさせたのは、主要人物について再導入させた場合が多かったのであるが、中でもゼロ照応を使用した場合はKHの3例を除き、すべて主要人物へのトピックスイッチであった。Clancy (1992) の提唱する 'ellipsis for hero' ストラテジーによると、トピックが主要登場人物にスイッチされる際に、ゼロ照応が使用されるということであるが、今回のデータからもその傾向がうかがえる。

トピックの連続的言及

トピックの連続性の最も高い文脈では、トピックスイッチのコンテキスト同様、「が」、「は」、「も」、助詞の脱落、ゼロ照応の5つの言語形式の使用が見られた。その5つの言語形式の使用割合の平均値を表4に示す。

ゼロ照応

トピックを連続的に言及する際、最も多く使用された言語形式はゼロ照応であった（全グループ平均使用割合H/N: 90.1%、T/T: 76.1%）。タスクごとに分散分析で5グループを比較した結果、H/Nではグループ間での有意差は見られなかったが、T/Tタスクでは、グループ間でのゼロ照応の使用割合に有意差が見られた（ $F(4,46) = 4.3$, $p = .005$, 偏 $\eta^2 = .271$ ）。シェフェーの多重比較の結果、EMグループのゼロ照応産出割合（61.7%）がNSグループ（ $p < .05$ ）とKHグループ（ $p < .05$ ）に比べて有意に低いのが分かった。

H/NとT/T間で、被験者内比較を行ったところ、タスク間でゼロ照応の使用割合に有意な差があることが分かった（ $F(1,46) = 42.7$, $p = .000$, 偏 $\eta^2 = .481$ ）。

この結果も、トピックスイッチの文脈におけるゼロ照応同様、聞き手と話し手の共有する事象について話をする場合と、話し手のみが持っている情報を用いてストーリーを構築していくことにより差が出たのではないかと思われる。ゼロ照応の使われた指示対象物について、詳しく見て行ったところ、ゼロ照応は主人公について言及する場合が多かったのではあるが、非主要人物についても連続した言及をする場合は、ゼロ照応を使用し、差別化を図っていないのが分かった。

表4 トピック連続的言及に使われた言語形式: H/N、T/Tタスク
(数値は使用形式ごとの割合の平均値)

NP+	が	は	も	助詞脱落	ゼロ照応
英語中級					
H/N	4.9	6.3	0	1.7	87.1
T/T	20.7	13.0	1.0	3.6	61.7
韓国語中級					
H/N	3.0	11.4	0	0	85.6
T/T	10.1	8.2	0.6	1.0	80.0
英語上級					
H/N	4.8	7.1	0	0	88.1
T/T	10.1	9.5	0.2	1.6	78.6
韓国語上級					
H/N	1.6	3.6	0	0	94.8
T/T	9.3	8.5	0	1.4	80.7
母語話者					
H/N	0.7	4.1	0	0	95.1
T/T	7.2	8.9	1.1	1.8	80.9
合計平均値					
H/N	3.0	6.5	0	0.4	90.1
T/T	11.7	9.7	0.6	1.9	76.1

注 H/NはHere and Now, T/TはThere and Thenのタスクを表す

フォローアップ面接の結果、タスクごとのゼロ照応の使用・不使用は意識的に行ったものではないことが分かった。共通の意見として得られたことは、映画を思い出しながら話をする場合は、頭の中で考えながら話すために、いかに複雑な内容の話を相手に分かりやすく話すかということに神経を集中させていたということである。それに比べ、絵を見ながら話す場合は、話し手の負担が大幅に軽減され、深く考えることもなく自然に話をする事ができたという意見が大半を占めていた。このフォローアップ面接の結果も考慮すると、聞き手と共有していない事象について言及し、ストーリーを発展させていくというタスクを行う場合、話者は聞き手への理解を促進させるために完全名詞句を使用する結果となったと言える。⁸

受身表現

受身表現については、グループごとの使用頻度を報告する。⁹表5に受身表現の出現頻度を示す。

表5に見るように、受身表現の使用頻度は学習者の日本語能力と比例していることが分かる。また、英語話者と韓国語話者で、その使用数に大差がないことから、本研究では、学習者の母語は受身表現の産出数に影響を及ぼしていないと言える。NSと日本語学習者では、異なるパターンが見つかった。NSの発話では、タスク間での受身表現産出数の差はほとんど見られなかったのであるが、学習者では上級話者の場合、母語に関わらずH/Nの方がT/Tより受身表現を多数引き出した。¹⁰ このことは、T/Tのタスクの複雑性が関連していると考えられる。T/Tの場合、物語の出来事を記憶に頼りながら出来るだけ着実に話そうとするために、主人公を中心に話すという「立場志向」から、ますます離反してしまい、ストーリーの局面ごとに起こった出来事、事象を中心に話して行ったのではないかと推測できる。

表5 H/N、T/Tタスクにおける受身表現の出現頻度

	H/Nタスク	T/Tタスク	合計
英語中級話者 (N=11)	4	9	13
韓国語中級話者 (N=10)	6	4	10
英語上級話者 (N=10)	18	9	27
韓国語上級話者 (N=10)	18	7	25
日本語母語話者 (N=10)	25	24	49

注 H/NはHere and Now, T/TはThere and Thenのタスクを表す

T/Tよりは学習者による受身形の産出数が多かったものの、H/NにおいてもNSと学習者では差が出たが、これは、物語談話を構成する際の思考の違いから来ているのではないかと考えられる。先述のとおり、日本語話者はストーリー構築をする際、特定の人物(主人公)に視点を置き、その角度から物語を語るのに対し、英語・韓国語話者の場合は、場面ごとの事象に焦点を置き、出来事を中心に話を進めていく傾向がある。中級話者での受身表現産出が低かったのは、言語能力の限界が考えられるが、上級レベルでの受身表現が母語話者より下回っているのは、やはりこの思考パターンの違いが、物語発話の構成に影響を及ぼした可能性があると言える。実際、NS、

学習者データで見られた受身表現の多くは、主人公が非動作主となっており、トピック性の高い(主語の)位置についたまま話が進められて行っている。NSの場合、主人公に視点をあてて話を進めていくため、主人公を非動作主とした受身表現が頻繁に見られるのに対し、学習者の場合、場面ごとの主体に焦点をあてる傾向があるため、受動文ではなく能動文が産出される傾向が多いのが分かった。このことは、英語話者でも、韓国語話者でも確認できた。

また、受身表現についてフォローアップ面接で質問したところ、学習者は日本語能力レベルに関わらず、受身表現の機能(迷惑受身)自体は理解できていたものの、物語談話の中で、受身表現が動作の受動者である主要登場人物をトピックとして維持するために使用されるということを認識していないことが分かった。

以上の結果から、話者の思考や物事の捉え方が大きく影響を及ぼす受身表現などにおいては、母語での傾向が(ここでは)負の転移として現れたと言える。Slobin (1991) が言うように、学習者が長年培った「思考パターン・コンセプトなど」は談話構成に大きな影響を及ぼし(‘thinking for speaking’), このような「概念的転移」は学習者の第二言語の能力が上がったとしても、中々排除することはできない難しい問題の一つであると思われる。Odlin (2005) が論じているように、言語の相対性(言語固有の構造が認知に及ぼす影響)と転移の関係は極めて重要なものであり、「概念的転移」を裏付ける証拠が増えつつあるが(Jarvis 1998; Odlin, 2005参照のこと)、未だ詳しく解明されていない分野であり、今後の更なる研究が望まれる領域である(Odlin私信, 2005年3月28日)。

まとめ

本研究では、話者がストーリーテリングにおけるトピック管理(トピック導入・維持)をしていく過程で、学習者の母語、タスクの複雑性及び学習者の日本語能力が及ぼす影響を見てきた。指示対象を導入、継続させていく際に使われる言語形式と受身表現の使用について調べたのであるが、研究設問1で挙げられた、トピックの管理能力の発達パターンについては、学習者の母語により影響を受ける可能性があることが再確認された。具体的に言うと、日本語と類型論的に類似した韓国語を母語に持つ話者は、中級レベルで既に、トピック導入の際の「が」の適切な使用や、トピック連続性の高いコンテキストでのゼロ照応の使用ができているのに対し、英語話者の場合、中級ではコンテキストに関わらず「は」の過剰般化が見られたが、日本語能力レベルの向上とともに、母語話者のトピック管理パターンに近似してくることが分かった。しかし、受身表現の使用については、動詞の活用を伴うということもあってか、英語話者だけではなく、韓国語話者も中級レベルでは、産出数が少なく、上級レベルに至っても、学習者の母語に関係なく、NSと比べると受身表現の合計産出数が半数に満たなかった。これは、日本語では、主要登場人物に焦点を当て、その人物を中心にストーリーを構築していくため、受身表現を使用することで主人公を主語の位置で保持するのにに対し、英語・韓国語では起こった事象を中心に談話を展開していくため、主人公ではなく、その時々が起こった事象の主体をトピックの位置に持つてくるという違いに起因しているのではないかと思われる。すなわち、学習者の母語での物語を構築していく際の概念がL2での談話構成に影響を及ぼしたと考えられる。

二つ目の研究設問にあった、タスクタイプの違いによるトピック管理パターンへの影響であるが、助詞の使用に関しては、韓国語話者においては、タスク間での差は見

られなかったが、英語話者においては、中級レベルでタスクによる違いが見られた。英語話者においては、T/Tのタスクでのナラティブの方が、助詞の脱落が減少した。一方、トピック性の高い文脈におけるゼロ照応の使用に関しては、学習者・日本語母語話者グループ全てにおいて、H/Nタスクの方がT/Tタスクよりも使用割合が高かった。これは、H/Nでのタスクが、目の前にある話を描写していくということで、トピックを省略しても聞き手に不理解をもたらすという危険性が低いからだと思われる。また、T/Tタスクにおけるゼロ照応の使用割合は、特に英語話者中級レベルで顕著に低いことが分かった。

トピックの連続性に関連する受身表現の出現数のタスク間での差異に関しては、母語話者と学習者で異なるパターンが見受けられた。母語話者による受身表現の出現数がタスクタイプに影響を受けないのに対し、学習者では、上級レベルにおいても、H/Nタスクの方がT/Tタスクよりも受身表現をより多く抽出することとなった。これは、T/Tの場合、H/Nとは違い、記憶に頼りながら、起こった出来事を確実に伝えようとするため、特定の人物を中心に話す「立場志向」から離れ、起こった出来事、その時々登場人物を中心に話を展開していったのではないかと考えられる。

以上のとおり、母語の違いやタスクの複雑性が、L2としての日本語でのストーリー構築におけるトピック管理に影響を及ぼすこと、また母語話者と学習者では、タスクの複雑性がナラティブ談話に及ぼす影響が異なるということも明らかになった。

今後の課題

本研究において、結果の解釈にあたり限界があった。本稿では学習者グループ比較により、母語からの転移を示唆したのであるが、Jarvis (2000) が指摘するように、学習者言語、母語話者によるベースラインデータに加え、学習者の母語データも考慮するのが理想的である。

また、データ抽出に使用した両タスクで、授受表現の産出が少数しか見られなかったため、分析対象としなかった。登場人物の多様性、物語の流れなどを考慮し、この2つのストーリーをデータ抽出のため使用したのであるが、今後の課題として、トピックの連続性・視点に大きな関連をもつ授受表現も抽出できるようなストーリーを選出する必要があると思われる。

母語話者全員にはフォローアップ面接を行う事ができたが、学習者からは1グループ2~3名ずつしかインタビューデータが集められなかった。学習者に意識調査をすることにより、学習者の習得の現状を捉える一助となるだけでなく、指導の指標も定めるのにも役立つことが見込まれるので、今後の課題としたい。

注

- 1 「私は今朝リンゴを食べた。〇おいしかった。」のように、既出の名詞(この場合「リンゴ」)を照応する際、照応詞を使わずに言及することをゼロ照応と言う。
- 2 SOPIはOPIと違い、対話者が存在せず、学習者がテープに向かって時間内にタスクを行い、判定者がテープを聞き、学習者の外国語運用能力レベルを事後判定するというものである。今回も録音する者がそばにいたものの、相づちなどを返さず、学習者にテープを相手とみなして、話すように指示を与えた。
- 3 映画は12分であったため、記憶力の限界のことも考え、ちょうど話の切れ目であった最初のほぼ6分までに編集し、そのストーリーを話してもらった。

- 4 例えば、話者Aの「指示対象導入」の回数が10回で、そのうち「NP+が」の出現頻度が5回、「NP+に」の出現頻度が2回であったとすると、この話者の「NP+が」の使用割合は50%、「NP+に」の使用割合は、20%となる。
- 5 この主張に関して詳しくは、Kellerman (1995) を参照のこと。
- 6 会話データなどでは、無助詞の使用が起こることが報告されているが（長谷川1993、丸山 1996）、ナラティブという独話のコンテキストでは、新情報には通常「が」の使用が規範とされている (Hinds, 1984)。本研究では、聞き手からのフィードバックを最小限にし、モノログ調で話してもらったためか、NS、韓国語話者のH/Nデータでは、助詞脱落は見られなかった。
- 7 両タスクでのカイ二乗検定の結果は以下のとおりである。
H/Nタスク
英語中級: $\chi^2(1) = 33.6$, $p < 0.001$ 、韓国語中級: $\chi^2(1) = 67.9$, $p < 0.001$ 英語上級: $\chi^2(1) = 133$, $p < 0.001$ 、韓国語上級: $\chi^2(1) = 64.5$, $p < 0.001$ 、母語話者: $\chi^2(1) = 10.6$, $p = 0.001$
T/Tタスク
英語中級: $\chi^2(1) = 97.0$, $p < 0.001$ 、韓国語中級: $\chi^2(1) = 62.6$, $p < 0.001$ 、英語上級: $\chi^2(1) = 115$, $p < 0.001$ 、韓国語上級: $\chi^2(1) = 92.6$, $p < 0.001$ 、母語話者: $\chi^2(1) = 59.8$, $p < 0.001$
- 8 この結果は、幼児の第一言語としての韓国語習得を調査したClancy (1997) の研究結果とも重なる。
- 9 授受表現の産出も調べたが、NSのデータでも産出数は極めて少なかったため、今回は分析対象から外した。
- 10 EMに関しては、T/Tの方が、受身形の産出数が多くなっているが、それは1名の被験者がT/Tで例外的に受身形を6回産出したことによる。

謝辞

本研究は、学術振興会科学研究費（課題番号15520330）の助成を受けたもので、本稿の執筆段階では、東京外国語大学大学院GP（「国際基準に基づく先端的言語教育者養成」）の補助も受けた。貴重なコメントをくださったJALT編集者及び査読者各位に感謝の意を表すとともに、統計処理について詳しくご指導くださったRusan Chen氏にもお礼を申し上げたい。

引用文献

- Andersen, R. (1977). The impoverished state of cross-sectional morpheme acquisition/accuracy methodology. *Proceedings of the Los Angeles Second Language Research Forum* (pp. 308-319). Los Angeles: Department of English, University of California at Los Angeles.
- Chaudron, C., & Parker, K. (1990). Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrases. *Studies in Second Language Acquisition*, 12(1), 43-64.

- Clancy, P. (1985). The acquisition of Japanese. In D. I. Slobin (Ed.), *The crosslinguistic study of language acquisition: Vol. 1* (pp. 373-524). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Association.
- Clancy, P. (1992). Referential strategies in narratives of Japanese children. *Discourse Processes, 15*, 441-467.
- Clancy, P. (1997). Discourse motivations for referential choice in Korean acquisition. In H. Sohn & J. Haig (Eds.), *Japanese/Korean linguistics: Vol. 6* (pp. 639-659). CSLI Publications.
- 土井利幸・吉岡薫.(1990).「助詞の習得における言語運用上の制約—ピーネマン・ジョンストンモデルの日本語習得研究への応用—」、*Proceedings of the conference on second language acquisition and teaching* (pp. 23-33). International University of Japan.
- Fuller, J.W., & Gundel, J.K. (1987). Topic prominence in interlanguage. *Language Learning, 37*, 1-18.
- Givón, T. (1983). Topic continuity in discourse: An introduction. In T. Givón (Ed), *Topic continuity in discourse: Quantitative cross-language studies*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gundel, J.K. & Tarone, E. (1983). "Language transfer" and the acquisition of pronominal anaphora. In S. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 281-296). Rowley, MA: Newbury.
- Harwell, M.R., Rubinstein, E.N., Hayes, W.S. & Olds. C.C (1992). Summarizing Monte Carlo results in methodological research: The one-and two-factor fixed effects ANOVA cases. *Journal of Educational Statistics, 17*, 315-339.
- 長谷川ユリ.(1993).「話し言葉における「無助詞」の機能」『日本語教育』、80号、158-168.
- Hinds, J. (1983). Topic continuity in Japanese. In T. Givón (Ed.), *Topic continuity in discourse: Quantitative cross-language studies* (pp. 43-93). Amsterdam: John Benjamins.
- Hinds, J. (1984). Topic maintenance in Japanese narratives and Japanese conversational interaction. *Discourse Processes, 7*, 465-482.
- Huebner, T. (1983). *A longitudinal analysis of the acquisition of English*. Ann Arbor, MI: Karoma.
- Huebner, T. (1985). System and variability in interlanguage syntax. *Language Learning, 35*(2), 141-163.
- Ishikawa, T. (2005). Investigating the relationship between structural complexity indices of EFL writing and language proficiency: A task-based approach. *JACET Bulletin, 41*, 51-60.

- Jarvis, S. (1998). *Conceptual transfer in the interlingual lexicon*. Bloomington, IN: IULC Publications.
- Jarvis, S. (2000). Methodological rigor in the study of transfer: Identifying L1 influence in the interlanguage lexicon. *Language Learning*, 50, 245-309.
- Jin, H. G. (1994). Topic-prominence and subject-prominence in L2 acquisition: Evidence of English to Chinese typological transfer. *Language Learning*, 44(1), 101-122.
- Kellerman, E. (1995). Crosslinguistic influence: Transfer to nowhere. *Annual Review of Applied Linguistics*, 15, 125-150.
- Kim, H. (1989). Nominal reference in discourse: Introducing and tracking referents in Korean spoken narratives. *Harvard studies in Korean linguistics*, 3, 431-444.
- 金慶珠.(2001). 「談話構成における母語話者と学習者の視点 一日韓両言語における主語と動詞の用い方を中心に」、『日本語教育』、109号 60-79.
- Li, C. & Thompson, S. (1976). Subject and topic: A new typology of language. In C.N., Li (Ed.), *Subject and topic: Symposium on subject and topic*, University of California, Santa Barbara (pp. 457-489). New York: Academic Press.
- 丸山直子. (1996). 「助詞の脱落現象」、『言語』、25-1:74-80
- Master, P. (1997). The English article system. Acquisition, function, and pedagogy. *System*, 25, 215-232.
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- 水谷信子. (1985). 『日英比較話しことばの文法』 東京:くろしお出版.
- Nakahama, Y. (2003a). Development of referential management in L2 Japanese: A film retelling task. *Studies in languages and cultures*, 25(1), 127-146. Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University.
- Nakahama, Y. (2003b). Cross-linguistic influence on the development of referential topic management in L2 Japanese oral narratives. Unpublished Ph.D dissertation, Georgetown University, Washington, DC.
- Nakamura, K. (1993). Referential structure in Japanese children's narratives: The acquisition of wa and ga. In S. Choi (Ed), *Japanese/Korean linguistics: Vol. 3* (pp. 84-99). Stanford: CSLI Publications.
- Odlin, T. (2002). Language transfer and cross-linguistic studies: Relativism, universalism, and the native language. In R. Kaplan (Ed.), *The Oxford handbook of applied linguistics* (pp. 253-261). New York: Oxford University Press.
- Odlin, T. (2005). Cross-linguistic influence and conceptual transfer: What are the concepts? *Annual Review of Applied Linguistics*, 25, 3-25.

- Polio, C. (1995). Acquiring nothing? The use of zero pronouns by nonnative speakers of Chinese and the implications for the acquisition of nominal reference. *Studies in Second Language Acquisition*, 17, 353-377.
- Robinson, P. (1995). Task complexity and second language narrative discourse. *Language Learning*, 45(1), 99-140.
- Robinson, P. (2001). Task complexity, task difficulty, and task production: exploring interactions in a componential framework. *Applied Linguistics*, 22, 27-57.
- Robinson, P. (2003). Attention and memory during SLA. In C. J. Doughty & M. H. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition* (pp. 631-678). Blackwell Publishing.
- Robinson, P. (2004). Comprehension, cognitive complexity, and task-based language production and acquisition. In D. Smith, S. Nobe, P. Robinson, G. Strong, M. Tani, & H. Yoshida (Eds.), *Language and comprehension: Perspectives from linguistics and language education* (pp. 187-240). Tokyo: Kuroshio Publishing.
- Rutherford, W. (1983). Language typology and language transfer. In S. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning* (pp. 358-370). Rowley, MA: Newbury House.
- Sakamoto, T. (1993). On acquisition order: Japanese particles WA and GA. *Proceedings of the 3rd Conference on Second Language Acquisition and Teaching* (pp. 105-122). International University of Japan.
- Slobin, D. (1991). Learning to think for speaking: Native language, cognition, and rhetorical style. *Pragmatics*, 1, 7-25.
- 田中真理. (1996). 「視点・ヴォイスの習得－文生成テストにおける横断的および縦断的研究－」、『日本語教育』88号 104-116.
- 田中真理. (1997). 「視点・ヴォイス、複文の習得要因」『日本語教育』92号107-118.
- 田代ひとみ. (1995). 「中・上級日本語学習者の文章表現の問題点－不自然さ・分かりにくさの原因を探る－」、『日本語教育』85号 25-37.
- Tomlin, R. (1990). Functionalism in second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 155-177.
- 遠山千佳. (2005). 「助詞「は」に関する第二言語習得研究の流れと展望－探索的研究と演繹的研究の枠組みから－」、『言語文化と日本語教育』、日本言語文化学会102-121.
- 渡辺亜子. (1996). 『中・上級日本語学習者の談話展開』、東京:くろしお出版.
- Yanagimachi, T. (2000). JFL learners' referential-form choice in first/through third-person narratives. *Japanese Language Education around the Globe*, 10, 109-128.